

市長記者会見記録

日時：2015年3月3日（火）午後2時～午後2時58分

場所：本庁舎2階 講堂

議題： トップアスリート就職支援ナビゲーション（「アスナビ」）説明会川崎市開催
について（総合企画局）

<内容>

（トップアスリート就職支援ナビゲーション（「アスナビ」）説明会川崎市開催について）

司会： 時間になりました。ただいまより、定例の市長記者会見を始めさせていただきます。

本日の案件は、トップアスリート就職支援ナビゲーション（「アスナビ」）説明会川崎市開催となっております。

それでは初めに、本日の出席者をご紹介します。

JOCキャリアアカデミー事業ディレクター八田茂様でございます。JOCキャリアアカデミー事業アスナビプランニングディレクター久野孝男様でございます。川崎市商工会議所会頭、山田長満様でございます。公益財団法人川崎市スポーツ協会会長、齊藤義晴様でございます。本市ゆかりのアスリート中田大輔様でございます。本市ゆかりのアスリート前田憲造様でございます。

続きまして、JOC主催アスナビ説明会川崎市開催の経過について市長から説明をいたします。市長、お願いいたします。

市長： それでは、アスナビ説明会の本市開催についてご説明させていただきます。

このたび、日本オリンピック委員会が実施するトップアスリート就職支援ナビゲーション、通称「アスナビ」を4月16日に本市で開催いたします。このアスナビの詳細につきましては、後ほど日本オリンピック委員会の八田様からご説明がございますが、本市で開催に至った経過等についてご説明を申し上げます。

アスナビとは、世界を目指す現役トップアスリートの就職支援活動として、これまで東京を中心に地域の経済団体等と連携し、全国で説明会が開催されておりますが、東京オリンピック・パラリンピックに向け本市と関係団体の連携した取組の1つとして、日本オリンピック委員会に本市での開催を働きかけたところでございます。

川崎市開催の特徴といたしましては、まずアスナビの開催は、神奈川県では本市が

初めてでございます。また、本市の強みである企業の集積を生かすことができると考えております。加えて、川崎商工会議所、川崎市スポーツ協会も共催されますので、市内企業等に広くアスナビの参加を呼びかけ、オール川崎の取組としてまいりたいと考えております。

また、本市が掲げる基本方向である「かわさきパラムーブメント」を推進する一環として位置づけ、オリンピックとともにパラリンピックを目指すアスリートの支援につなげてまいりたいと考えております。

さらに、トップアスリートからの体験談として、ビーチバレーの朝日健太郎さん、そしてアスナビでは初めてとなるそうですが、パラリンピアン^①の成田真由美さんをお迎えして、市内の企業やアスリートに向けて応援メッセージをいただくこととしております。

地元経済団体やスポーツ関係団体をはじめ、地元の多くの企業の皆様には、ぜひともアスナビの趣旨にご賛同をいただき、一人でも多くのトップアスリートの就職支援につなげ、川崎ゆかりのオリンピック、パラリンピアンが誕生しますようオール川崎で盛り上げていきたいと考えております。以上です。

司会： ありがとうございます。

続きまして、日本オリンピック委員会、八田様からアスナビの概要説明をお願いいたします。よろしく願いいたします。

JOCキャリア アカデミー事業ディレクター八田氏（以下「八田氏」）： それでは、私からお手元の資料にのっとりまして、アスナビの概要についてご説明をさせていただきます。

お手元でございます資料「アスナビ就職支援希望アスリートエントリーシート」という資料とカラーの資料と2種類ございますが、エントリーシートの資料からご覧いただきたいと思います。

最後のページで8ページをまずご覧いただければと思います。ここにアスナビ概要と書かせていただいておりますが、活動自体は2010年10月から、今回、川崎市さんとやらせていただくような説明会を始めさせていただいております5年近い活動になっております。

ただいまの実績といたしましては、ここでは43社、58名とございますが、1名ごく最近に採用が決定いたしまして、43社、59名の選手が、これまでこのアスナビの活動を通じて企業様に採用されております。

採用企業の規模はここにごございますように、上場企業、非上場企業、約半々でござ

いまして、色々な企業様にご採用いただいております。

雇用形態は、正社員もしくは契約社員ということで、このアスナビというプロジェクトは、いわゆる選手を企業がスポンサーするという活動ではございませんで、企業に採用していただいて、選手はその会社の一員として社員なり契約社員選手として活動するというのが一番大きな特徴でございます。

お給料は、その選手の年齢とほぼ同等の社員の方と同じような給料を月額固定給でいただいて、選手が各自自分で負担しているような競技の活動費を、一部もしくは全部経費負担をしていただくという形で雇用いただくということでございます。

現役優先の勤務スケジュールということで、種目にもよりますが週に二、三日の会社を通じて会社の仕事もさせていただく。配属部署は、主に本社の管理部門になっておりまして、オリンピックやワールドカップを除きますと、いわゆる日本選手権等であれば、採用いただいた企業の社名を背負って大会に出られるということでございます。

前後いたしますが、これまでの説明会の実施状況を6ページ、7ページに書かせていただいております。これまで19回の説明会を開催しております。経済同友会さんや、商工会議所さん、経団連さんというような経済団体さんを中心としまして、去年は東京都内ですと板橋区や北区さんとの共催でも説明をやらせていただき、大分県さんで昨年、九州では初めて説明会をやらせていただきました。先ほど市長からご説明いただいたようなプログラムで、直接就職希望する選手がご興味のある企業の経営者の方にアピールをする会ということでやらせていただいております。選手の実情を少しでも知っていただくということで取り組んできております。

これまでの就職決定選手というのは、お配りの資料の2ページ、3ページ、4ページのあたりに一覧が書いてございまして、夏の選手が約20名強、2枚目に冬の選手が同じように20名弱。それから、先ほどお話もありましたパラリンピックを目指す選手は6名ほど採用実績が出ております。

昨年度は、新卒の選手の採用が非常に進みました。ここにごございますように、この春に12名の新卒の選手が社会人になると同時に企業に採用いただいて現役が続行できるということでございます。今年の4月16日の川崎市さんとの説明会にも、この4月に4年生になる選手の出場予定もございます。夏、冬、パラリンピックの選手を含めて、そういう選手たちのアピールの場にさせていただければと思っております。

もう1枚の資料のカラー刷りは、1枚めくっていただきますと、実際に採用いただいた企業様の事例紹介が3社書かせていただいております。左上にアスナビの採用の

メリットということでございますが、先ほど言いましたように、実際にその会社の社員もしくは契約社員の一員として選手が競技を続けていくということでございます。選手が企業人になって、その会社に提供できる色々な刺激等々、またそれによって社員の一体感とか活性化が生まれて、企業の認知度も高めることができるということで、企業様にとってはスポーツ社会貢献活動の新しい一歩ということで活用いただいております。

ここにございますようにキックマンさんでありますとか、東北の岩手県的设计会社さん、それからパラリンピックの選手は、この健康食品の製造販売会社さんをご採用いただいて、それぞれこの3社は全部オリンピックやパラリンピックに選手が出場しておりますので、大変社内外も活性化できたということでございます。

以上がアスナビの概要でございます、繰り返しになりますが、選手を雇用いただいて会社と選手が一体となってウイン・ウインの関係で活躍していくのを応援いただくプロジェクトでございます。川崎市さんとのコラボレーションでぜひ大きな一歩が踏み出せればと思っております。よろしく申し上げます。

司会： ありがとうございます。

続きまして、共催団体からごあいさついただきます。初めに商工会議所会頭、山田様、よろしくお願いたします。

川崎商工会議所山田会頭（以下「山田会頭」）： 川崎には大企業から中堅企業、中小企業、ベンチャー企業、数多くの企業が集積しております。トップアスリートの方々が安心して世界で活躍できるように川崎の経済界としてもトップアスリートの方々の就職支援に全面的に応援していきたいと考えております。

司会： ありがとうございます。

続きまして、川崎市スポーツ協会会長、齊藤様、よろしくお願いたします。

公益財団法人川崎市スポーツ協会齊藤会長（以下「齊藤会長」）： こんにちは。今回の川崎市並びにJOCとのこうした取組は、私どもスポーツ団体としては大変喜ばしいことであり、今後川崎のスポーツの発展に大きく寄与する起爆剤になるのではないかと大歓迎いたしております。今、商工会議所の会頭さんがおっしゃいましたように、多くの人を採用してやろう、商工会議所では産業文化大使という制度がございますけれども、私どもスポーツ協会の推薦する選手をたくさん起用していただいております。そして、今日アスリートとして参加をされております中田選手もそうでございます。そして、私どもは既に将来が嘱望される選手をスポーツ協会の、あるいは指定管理事業の嘱託職員として採用して、スポーツの教室の企画であるとか、色々なことに貢献して

もらっております。高橋和馬君という日体大卒業の選手が既に一昨年全日本の社会人で優勝するという結果も出してくれております。中田さんとペアで大きな実績を上げてくれています。それに続く種目がたくさん出ることを心から期待しております。

司会： ありがとうございます。

続きまして、アスリートからコメントをいただきたいと思います。初めにトランポリンの種目でオリンピックシドニー大会に出場されるとともに、川崎市トップアスリートに認定されております中田大輔様からメッセージをいただきます。よろしくお願ひします。

中田大輔氏： 皆さんこんにちは。今回このような制度ができるということで、私アスリートの立場から少し述べさせてもらいたいと思います。自分自身の経験としまして、競技をやっている高校・大学ぐらいまでは本当に競技に没頭できるんですけども、大学の後半になってくると今後の自分のことがすごく心配になってきて、競技にも打ち込めなくなってきたりします。自分自身の場合は、大学を卒業するときにはオリンピック種目でもなかったのです。種目自体がオリンピックのスポーツではなかったもので、スポンサーとかこのように支援してくれる企業がなくて、自分が選んだのは競技をしながら昼間は非常勤職員として働き、夜はガソリンスタンドで徹夜の勤務をしていました。本当に寝ないで生活をしていたのです。2日に1回しか睡眠をとれないという生活をしていました。選手としては最低の練習だと思うんですけども、そうでもしていかないと海外遠征の費用が払えなくて、今とは違いまして全額負担という時代だったので、非常に苦労しながら頑張った記憶があります。

でも、最近このアスナビもそうですけれども、非常に選手に対するサポートが厚くなってきて、実際、私は今選手もやっているのですけれども、トランポリンの日本代表男子コーチとしても同時にやっています。日本代表の選手たちの中にも、このアスナビさんから選手を抱えてもらって、僕が実際に指導している選手の中にも、次回から競技に安定した形で取り組める形でアスナビにお世話になった選手もいます。これから2020年のオリンピックに向けても本当に選手には競技だけに集中させてあげたいというか、そういう環境になってくれると非常にレベルも上がってくると思いますし、日本にとっても、そして2020年のオリンピックにとっても非常に国民全体が応援できるような基盤ができてくるのではないかと思います。

試合会場でも、トランポリンという全然知らないスポーツですけれども、ある企業に見てもらふことによって試合会場にその企業の皆さんが旗を持って応援に来てくれるんです。そういう姿を見ていると、僕らもすごくうれしいですし、その選手がそれ

まで本番で出せなかった力強さというものを発揮するのをたびたび見えています。ぜひ色々な企業の皆さん、トランポリンとかほかのスポーツもそうですけれども、すごい選手が埋もれているといいますか、きっと次のオリンピックの候補になるだろうなという選手がたくさん埋もれていますので、ぜひそういう選手たちに手を差し伸べていただいて、これからも活性化していただけるとすごく僕たちもうれしいので、ぜひともこれからもよろしくお願ひしたいと思ひます。

司会： ありがとうございます。

続きまして、本市の職員で車いすバスケットボールの種目でパラリンピック北京大会に出場された前田憲造様からメッセージをいただきます。前田様、よろしくお願ひします。

前田憲造氏： こんにちは。今回、本市アスナビ説明会が開催されることにより、市内の企業の皆様がアスリートの活動を理解していただくよいきっかけになると、選手側にとっても目標に向かって努力できるものとして大変すばらしい企画であると思ひております。

私の経験ですが、団体競技を行ってござりまして、日本が島国である以上、海外相手の経験を積むためにどうしても1週間以上の遠征や合宿などに参加し、職場を不在にすることがありました。そのときは上司、同僚、後輩からも多大なご協力、ご理解をいただいた経験がござります。これから、世界を目指す選手が、このアスナビを利用して就職できることは、自分がどういう人間でどういう立場で採用されているかが企業側に理解していただいているという面では、選手側には大変メリットがあると思ひております。また、こうしたトップアスリートを応援する企業が増えることも大変重要であると思ひております。

今後は、本市からオリンピックやパラリンピックなどの大会に出場でき、メダルをとることができるアスリートが1人でも多く生まれるように、私も微力ながら経験者の1人として応援していきたいと思ひております。よろしくお願ひいたします。

司会： ありがとうございます。

次に、本日はお越しいただいてござりませんが、アスナビの場でメッセージをいただくパラリンピアンの方の成田真由美様からメッセージをお預かりしてござりますのでご紹介いたします。

「アスナビの開催が様々な方々にパラリンピックアスリートを知っていただくきっかけになり、競技を続けるための支援の輪が広がることを願ひております。」

以上、メッセージを紹介していただきました。

それでは、質疑応答に入らせていただきます。幹事社のほうでよろしく願いいたします。

幹事社： 最初にお伺いしたいのですが、川崎の企業でアスリートを支援しますという企業がいるのでしょうか。事務方のほうがいいですか。現時点で、この説明会をやる時点、もう既に川崎の例えば本社を置いている企業さんで支援していますという企業はいるのですか。パッと見てわかる範囲で。

八田氏： 採用実績の企業様では、川崎市に本社を置かれている会社さんは、今のところまだないと思います。

幹事社： ない、わかりました。そういうことを踏まえて増えてほしいということで説明会を開く。

八田氏： はい。

幹事社： わかりました。もう一点、これは五輪種目に限ったということでもいいのですか。将来五輪の候補になりそうだというものも含まれているのですか。

八田氏： 現在は五輪、オリンピック種目に限っております。オリンピック・パラリンピック種目です。もう少し言いますと、オリンピックとパラリンピックの種目のいわゆる強化指定選手という、平たく言うと日本代表候補選手ということになりますが、その最上位のクラスの選手がこのシステムの登録ができるということにしております。

幹事社： 各社さん、お願いします。

記者： 山田会頭、今回この説明会に川崎市の企業として参加してもいいよというのは、どのくらいのレベルの数になりそうか何かありますか。

山田会頭： 今回のこのような企画は初めてですので、まだ市内企業に具体的には当たっておりません。私個人的なことですけれども、実はアメリカンフットボールの有馬隼人さん、オリンピック強化選手ではなかったと思うのですが5年間応援したことがありますし、川崎の中小企業からも中堅企業からも声がありますので、私は大きく期待を持っております。

記者： これまでの実績、例えば東京商工会議所だと76社だとか114社という数の参加の会社名が出ているのですが、希望としてどのくらいというのはありますか。

市長： これから商工会議所さん、あるいはスポーツ協会さんと連携して活動していきますけれども、できる限り、100社を目指して頑張っていきたいと思っています。

記者： 八田さんにお聞きしたいのですが、参加する、逆に反対側、採用を希望するアスリートは今回の川崎についてはどのくらいの人数が見込まれているのでしょうか。

八田氏： 通常ですね、この説明会実施状況のところのプレゼンアスリートという欄に、これまでの説明会でプレゼンをさせていただいた選手の一覧が書いてございますが、大体五、六人の選手を、その段階で、話が前後しますが、実は今日お配りしていますエントリーシートといいますのは、本来はお配りしているこの皆さんの資料の後ろに個別の選手のエントリーシートがセットされていまして、それが1冊になったものを当日会場でもお配りをするような形です。大体、夏冬合わせて20人から30人くらいの選手のリストがエントリーシートとしてありまして、その中の五、六人がプレゼンをさせていただく。ビデオプレゼンというのもここに何人か名前が出ていると思いますけれども、当日、大会等で出られない、しかし、ぜひアピールさせたい選手はビデオでの登場もやらせていただいていますので、そういう人が1人、2人出るかもしれません。

記者： 基本的には、そのプレゼンをしたアスリートが対象者になるということですか。

八田氏： いえ、プレゼンしたアスリート、プラスこのリストにとじられているその時点でエントリーしている人たちが対象になります。

記者： 市長が話されたかと思うのですが、日程で成田さんのことを紹介される際に、アスナビでは初めてとなるとおっしゃったような気がして何のことかなと思って、パラリンピアンの方の就職支援は初めてかと思ったらそうでもない6人いる。初めてとは何が初めてですか。

八田氏： 説明会の中で、この説明会実施状況という資料に講演オリンピックという欄が付いているかと思えますけれども、今回、成田さんと朝日さんは先輩オリンピックとして応援スピーチをしていただくのですけれども、応援スピーチでパラリンピアンのメダリストの方にスピーチをしていただくのは初めてということです。

記者： そのあたりは市長が働きかけたのですか。

市長： 成田さんには、これまでも何度かオリンピック、パラリンピックにどう取り組むかということで色々なご相談をさせていただいております。その中で今回のアスナビのことについては、ぜひご協力いただけないかということで呼びかけさせていただきました。

記者： 背景にはパラムーブメントというのが。

市長： それもでございます。

記者： すみません、細かいことを幾つか確認させていただきたいのですが、先ほど八田さんのご説明にあったように、手続論なんですけれども、就職を希望した

選手が何かのシステムを使ってまずここにエントリーするということですか。

八田氏： まずエントリーの仕組みは、就職を希望する選手が、所属している競技団体、コーチなりスタッフを通じて、その競技団体にこのアスナビで就職支援のエントリーをしたいという形で選手が手を挙げます。競技団体のほうで、その選手を推薦してもいいという場合は、現物のエントリーシートには裏面に競技団体の推薦コメントの欄がございまして、推薦コメントをつけていただいて、オリンピックの場合ですと、その競技団体からJOCの我々のところにエントリーシートと推薦コメントが届きます。そうすると、我々のところでそれを受け付けて登録完了といたしますので、その人たちが今申しましたエントリーシートとして冊子にとじられて、同時にJOCのホームページにもエントリーシートは開示をしているのですけれども、アスナビのエントリーが完了して、就職支援対象選手になります。

記者： パラの場合はJOCのところがパラリンピック協会になるのですか。

八田氏： パラの場合は、今言いましたようにパラの選手がパラの競技団体にエントリーをし、競技団体が同じように推薦コメントをつけてJPC、日本パラリンピック委員会に上げる。その後、パラリンピックの選手も我々のところで一元的にサポートをしているものですから、JPCからJOCにエントリーシートと推薦コメントが上がってくるという流れです。

記者： 最終的にはJOC。

八田氏： そうです。JOC、我々のところで登録を受け付けて登録完了ということにいたします。

記者： こういう具合にエントリーシートができて、これをあらかじめ企業の皆様にお配りするのですか、それともその場でお配りするんですか。

八田氏： これまでですと、説明会のときに初めて企業様の関係者の方がその場に集まってこられるので、そこで配付をします。エントリーの受け付けができた段階でJOCのホームページには、その選手のエントリー情報は別途ウェブ上に掲載されている状態になります。

記者： 企業に会場で配付するとともに、JOCのホームページにも。

八田氏： 開示をすると。

記者： プレゼンの内容ですけれども、自分の競技に対する実績とか思いとか、それプラス自分が希望する職種とか企業とか業種とか、そういうところまで含めたプレゼンになるのですか。内容を具体的に。

八田氏： 大体1人、三、四分の時間でプレゼンをしておりますが、今おっしゃって

いただいたように、自分の競技実績、競技への取組意欲、競技の目標、競技に関する話と、お話のようにどうやって採用いただいた会社で貢献をしていきたいかというお話をいたしますが、多くの選手が先ほどご紹介しましたように新卒もしくは新卒にプラス、二年経ったぐらいの選手ですので、実務経験がない選手がほとんどなものですから、何ができますということはなかなか言えないケースが多くて、どんな会社でも、どんな仕事でも、こうこうこういう力を使って頑張りますというプレゼンテーションが多いです。中にはこういう業界の仕事ということを言い出す選手も最近は少し出てきました。

記者： わかりました。

記者： 先ほどの手続論でもう1つあるのですけれども、今回、川崎の企業さんたちに、こういう方々の採用はどうかとお願いするものですが、エントリーする側は日本全国から募るという理解でいいですか。

八田氏： はい。選手からすれば自分を採用いただけて、ただその選手の練習環境が、今回はこの川崎の説明会でプレゼンテーションをさせたいと思っている選手は、川崎もしくはその近隣に練習環境を置いている選手たちになると思いますので、その選手の練習環境が維持できるような会社がもし仮に北海道の会社でも、そのA君という選手をとって、その選手が例えば川崎で練習してもいいぞということになれば、それもあり得ますけれども、今回の場合はあくまでも川崎の企業様にそういう近しいところでの練習環境を希望している選手を募ってアピールをさせるという予定であります。

記者： 市の内外は問わないということですね。

八田氏： 今回この説明会にご参加いただく企業様、これから……。

記者： 選手のほう。

八田氏： 選手は市内外を問わず、自分の希望している競技環境が維持できる会社ということになります。

記者： 今回、説明会はプレゼンで、その後はもう閉会になるのですけれども、実際採用になると個別に面談とか交渉になると思うのですが、そういうのはどういう手続になるんですか。

八田氏： 今回この説明会の後に、こちらの先ほど市長からご説明いただいた資料にも説明会の閉会后に選手と参加企業との懇談会を1時間程度設けています。そこではフリーに興味があった選手と企業がやりとりをしていただきます。ですが、そこでも話ができる範囲は限られますので、その後、ご興味を持った会社が我々のところにお問い合わせをいただいて、我々のスタッフが当該の企業と希望する選手の状況を聞いて

て、選手にこういう企業からオファーがあったけれどもということで、我々が間に入って面接なり何なりの調整をいたします。実際、最終的にはその企業で採用選考の面接であったり、採用試験をしていただいた上で就職内定、採用という流れになります。

記者： わかりました。

先ほど市長がおっしゃった100社というのは、説明会への参加企業の目標ということですか。

市長： そういうことです。

記者： 実際、何社ぐらい何人ぐらいってほしいという目標というか希望みたいなあるんですか。

市長： それは本当に1人でも多く、1社でも多くということです。初めての本市での開催になりますので、希望は1社でも多くということでもあります。

記者： すみません、もう1つだけ細かいところで、先ほどお一方増えて43社、59人ということですが、アスナビの概要だと夏季選手、冬季選手、パラリンピック選手と分かれています、どこが増えたのですか。

八田氏： 夏の選手で陸上の幅跳びの選手の女子が1名追加で採用されております。

記者： そうすると、この30人が31人になるということですか。

八田氏： そうです。そういうことになります。

幹事社： 今回のお話はJOCのほうから川崎市に持ちかけたのですか、それとも川崎市が手を挙げたという形ですか。

市長： オリンピック・パラリンピックに向けて、JOCの幹部の方と私が直接お話しする機会が何度かありまして、その席上このアスナビという取組があることを知りまして、川崎の強みである企業集積が、ぜひともこれは川崎でできるのではないかとということでJOCさんのほうにお話をさせていただいて検討していただいて本市での開催になったということです。

幹事社： わかりました。

もう1点、選手肖像利用だったのですけれども、就職した企業に全て肖像権が、所有権が移るというイメージでいいのですか。

八田氏： その選手が当該企業の社員もしくは契約社員という立場になりますので、その意味で、例えばホームページに出たり、その会社の会社案内やパンフレットに登場するということが可能ですよという意味です。

幹事社： わかりました。

記者： せっかく選手がいらっしやっただけで、前田さんにお伺いしたいのですけれど

も、前田さんは先ほど市の職員とおしゃっていましたが、今はどちらにご所属なんですか。

前田憲造氏： 私事で申しわけございませんが、総務局危機管理室というところに勤務しております。

記者： なかなか忙しいご職場だと思いますけれども、遠征に行ってくるよというときには比較的気持ちよく出してもらえるものなののでしょうか。

前田憲造氏： 表面的は多分よくしてくれています。本当に頑張ってきてくれとか、仕事もやっていただいたり、本当にそこら辺はご理解をいただいたところでございます。

記者： それを踏まえて市長にお伺いしたいのですけれども、川崎市としては障害者、障害のある方の雇用とかウェルフェアに関しても積極的に取り組まれていると思うのですが、前田さんのような組織、市役所に所属しながらトップアスリートとしてパラもしくはオリンピックに向けて活動している選手たちはほかにもいるのか、あるいはそういう人たちが競技に専念しやすいような制度は市役所の中にあるものなののでしょうか。

市長： 事務方からでもいいですか。

都市経営部長： 前田君の場合は、市の職員の採用は当然公平で広く募集をかけて、その中から採用ということになるのですけれども、身体障害者枠での採用というのも枠としてございまして、当然、例えばスポーツがあるからとかそういった採用ではなくて、公平に試験採用で雇用しております。以上です。

司会： 質疑はよろしいですか。

幹事社： 各社さん、よろしいですか。

司会： それではここで出席者の方の撮影をさせていただきたいと思います。

(写真撮影)

司会： それでは、本件につきましては以上をもちまして終了させていただきます。ここで関係者の皆さん、退場させていただきます。よろしくお願いいたします。

《市政一般》

(市職員の不祥事について)

司会： お待たせしました。市政一般となります。ここからの進行は幹事社さんをお願いします。市長、よろしくお願いいたします。

市長： 改めてよろしくお願いいたします。

幹事社： 代表質問で市の職員の処分のケースについて問い合わせがありましたけれども、こういう事件が起きた中、教職員3人の処分が発表されましたが、職員のモラルと申しますか、公務外のことですけれども結構わいせつ事案とかがやはり印象的に強くて、もう少ししっかり内部として指導するべきなのではないかと思うのですが、いかがでしょうか。

市長： もう本当におっしゃるとおりで、教職員だけではない、市長部局のところもそうですが、公務員、特に教育長のほうも答弁でさせていただいているとおり、普通の公務員よりさらに1つ上の倫理感が求められるような職種にありながら、わいせつ事案だとかあるいは窃盗事案だとか、普通の一般人であっても明確な犯罪行為でありますけれども、絶対にあってはならないことがたびたび起きているのは緊急事態だと思っています。そのことは繰り返し言っているところでありますし、教育長からも教育委員会の中でしっかり言っている中であつてもまだ事態が発生しているという現実を強く受けとめなくてはいけないと思っています。

たびたびこの記者会見の場で申し上げているところですが、引き続き厳しく指導していくとともに、不祥事を生まない体質というか土壌をつくっていく、細かいところでのコミュニケーションに努めていくといったことを両方組み合わせてやっていかなくてはいけないと思っています。改めて本当に市民の皆さんに深くおわびを申し上げたいと思っています。

記者： 関連してですけれども、事件の後に先生のわいせつがあつたのですけれども、それについては市長はどのように思われたのでしょうか。

市長： いやもう、はっきり言って言葉が出ないというのが正直な感覚で、本当に言葉を失つたというのが私の正直な印象で、改めて市民におわびを申し上げたいとそのことに尽きますし、繰り返しちゃいけないということをこれからも厳しく指導していきたいと思っています。

幹事社： 各社さん、お願いします。

(中学生死亡事件について)

記者： 市立中学校の事件のことですけれども、市長自身、昨日お通夜に行かれたと伺っているのですが、ご遺族の方とお話し等々はされたのでしょうか。もしされたとしたら、どんなお言葉をかけたとか向こうの反応というか様子がもしお話しできれば。

市長： 式が始まる前に弔問させていただいたのですが、お母様とお話しができました。お母様に対してはお悔みを申し上げたということと、私としても一人の子どもを

持つ親として非常に何と申しましたか、悔しいし憤っているということを申し上げたのと、それから市長としても何かできなかったものなのかということを実際に悔しいというお話をしました。また市のほうで何かサポートできるようなことがあればおっしゃってくださいというお話をしました。それについては、ありがとうございますという話はお母様からありました。

記者： 今の中1事件の関連ですけれども、市長は今回全庁的な対応が必要だということで対策会議を今日立ち上げられたのですが、危機対応のマニュアルをもう1回読み返してみたのですけれども、今回、初動の段階で教育委員会がほとんどやっていて、これは危機対応マニュアルを見ると、事件とか事故が起こった場合も危機管理の体制が発動することになっているのですけれども、市長はこれは全庁的な危機状態にあるというご認識ではなかったということですか。つまり、危機管理体制となった場合には、危機管理室が入ってきたりだとか、危機管理対応副市長のところへ情報が上がってきて全庁的な体制を整えるというのが、26年に改訂されたマニュアルにあるフローですけれども、今回は教育委員会が誤解を恐れずに言えば、ある意味アドホックに対応をしていて、そこに市長部局が後から入ってくるという形だったので、もし危機管理とお捉えだったならば危機管理体制としては少しいかなものなのかというところがあるのですけれども、この事態を市長としては危機管理が必要な状況という具合にお捉えになられていたのでしょうか。

市長： 最初の第一報のところでは危機管理という形では私は少なくとも認識はしていなかったです。いわゆる事件の概要がほとんどつかめなかったというのがございます。若い男性だとか情報が非常に錯綜していて事件の概要自体がほとんど最初伝わってこなかったということがありますので、そういった意味で第一報のところでは危機案件かというご質問であれば、そういうふうには感じておりませんでした。

記者： その後のご認識としてはいかがでしょうか。

市長： まさに今対策室をつくってやっているのはまさに危機対応というか、危機的な状況にあると思っています。

記者： 通常、危機的な状況が起こった場合には、既につくられている対応のマニュアルに沿って事が進むはずですが、今回若干イレギュラーなことではあったとも思うのですが、教育委員会に検証委員会を立ち上げて、プラスして全庁で対策会議を立ち上げてという具合に、危機管理として捉えていた場合には、マニュアルにはないフローで状況が動いているのですけれども、それはどうしてですか。

市長： マニュアルが全ていいかというのは、僕はそれこそ少し違うのではないかと

思います。マニュアルどおりにやっていたらそれでいいのかということでは僕はないと思うし、まさに教育委員会のところだけではないだろうというところで全庁的な体制を取り上げているとか、あるいはアドホックな形でこれからも必要な人材をどんどん入れていくということですから、まさに危機的な状況をどう今後解決していくか、あるいは二度と起こさない体制に取り組んでいくかというのは、マニュアルではないまさに危機対応をしていかななくてはいけないと思っています。

記者： 市長のおっしゃるとおりだと思うので、質問はここまでにしますけれども、要するに危機対応マニュアルの要諦としては、市長が常々危機管理のときにおっしゃっているように、とにかく迅速に動いて大きく構えて、結果として何もなかったり事が小さく済んだらそれでよかったねというのが危機管理の要諦であると市長がおっしゃっていたと思うのですけれども、今回、残念ながら初動の段階では、情報が錯綜していたこともあるのですけれども、子どもだとわかって以降もなかなか動きがはっきり見えなかった感じがするのですが。

市長： 危機の状況というのが自然災害のようになっていくものと、何というか事件が起こったことに対して、それをしっかりと検証してその必要な状況を抑えていくというのは、捜査の進展を見ながらというのも、はっきり言ってどこまでが正しい情報なのかというのは、今もマスコミを通じて知っているというのが実情の部分が多くあります。その中で正しい情報は何なのかとしっかりと見きめてやっていかないとはいけませんので、ある意味ネットも含めて色々な情報が出回っている中で、それに振り回されてはいけないと思っています。

記者： それに関連してなんですけれども、被害者の少年が川崎に出てくる前に住んでいた島の人たちの悲しみも大変大きいようですけれども、地域、自治体、エリアとして川崎の首長として、島の人々へのメッセージがありましたら。

市長： 島の人たちにですか……、そうですね……、子どもころ川崎に来られる前に住んでいたところは報道もされて非常にいい環境で育てられたと聞いておりますので、そういうところで育ったいい子が、こういうことで残念ながら本市で事件が起こってしまったということは非常に残念に思っています。島の人たちへのメッセージは、私からは言いにくい部分があります。少し適当な言葉が見つからないです。

幹事社： 事件に関していいですか。

市長： どうぞ。

幹事社： 教育委員会の事件の対応ですけれども、外部からの指摘があつてようやく臨時の教育委員会を開くとか、実質的に土曜日の朝の段階で身元が市立の中学生、上

村君だとわかったにもかかわらず、そういった対応が相当後手におくれていたのですけれども、その件について所感をお願いします。

市長： そのあたりも含めて検証委員会でしっかりと明らかにしていかななくてはいけないと思っています。

幹事社： その検証委員会の関係で、長期欠席の児童を文科省でもやるようにという指示があったとは聞いてはいますけれども、ただ長期欠席の児童を把握することは確かに大事だとは思うのですけれども、今回の事件にそれほど結びつくと言われてたらそうでもない気がするのです。その点について、何かそこで問題、話がすりかわっているのではないかなと感じるのですけれども。

市長： とにかくあらゆることのアプローチを考えなくてはいけないと思うのです。何か1つをやれば事が解決するような単純な話ではないと思っています。あらゆる角度から見てみるという1つにはなるのではないかとと思っています。

幹事社： わかりました。

記者： 先ほどよくマスコミを通じて情報を知っているという事実があるというお話があったのですが、そこで情報共有があまり密ではないかなという印象を少し受けたのですが、知識不足で申しわけないのですが、実際、警察との連携はどういった体制になっているのかを教えてくださいませんか。

市長： 捜査の状況はほとんど川崎市にもたらされていないというのが、どこまでかというのは細かに私は承知しておりませんが、むしろ報道のほうから伝わってくる情報のほうが多いのは現実のところでは。

記者： 他都市ですともっと密に連携しているという話を聞いたのですけれども。

市長： どういう事案かによっても随分違ってくるのではないかと思いますけれども、こういった捜査中の案件についてはどこまで普通は警察が出すものなのかというのは、状況によって私も一概に言えないのではないかと思います。

記者： そうしますと現状に市長としては不満はない状態ですか。

市長： うん？

記者： 現状に市長としては不満がない状態ですか。

市長： 不満がないというよりも、早く捜査が進んで情報が明らかになっていくことを私は強く望んでいます。

記者： 例えばですけれども、これがいいかどうかはともかくなのですが、現在では教育委員会には逮捕されたのがどういう人なのかわかりませんという話であるとか、あるいは、報道によると事件が起きるしばらく前に、臨港署のお巡りさんが容疑者の

少年と上村君の仲間とのトラブルを把握していたということが報じられています。例えば、そういう情報を市と警察でうまくやり取りできていればもしかしたらですけども、危機的な状況に陥っている子どもがいるかもしれないなということ把握できた可能性もあるのかなという感じがするんです。

市長： まさにそのことを今検証しているということです。ですから、だれがどこの何の情報を知っていたのか、そこを共有できていたのか、共有すべきだったところできていたのかできなかったのか。まさにそのことを今、事実をしっかりと照らし合わせて検証して次につなげていくという、第一段階の事実がどうだったのかということについてしっかりやっていくと。そのところにもしご指摘なようなことがあれば、ここできていなかったのではないかということにつながってくると思うのですが、まずそこから確認をして丁寧にやっていくことを今やっているところです。

記者： その検証委員会は始まったばかりだと思いますが、現時点までに何かご報告があったり、もしくは市長から指示等というのは。

市長： 今日検証委員会と対策会議がそれぞれ立ち上がりましたけれども、それぞれ何について、先ほど資料提供させていただいたと思いますけれども、これこれについてそれぞれ調べてくるということについて確認をしたというところです。

記者： まだあまり細かいところには。

市長： 細かいところには踏み込んでいないです。それを早急にそれぞれの、まず教育委員会の検証委員会のところで事実関係を丁寧に掘り下げていくことをやっていきます。

記者： 市長、せっかくなのでテレビさんも来ていらっしゃるんで、今検証はしっかりやって、再発防止はしっかりやられるという市長の意気込みはすごく伝わってきているので、ただ一方でこの瞬間にも上村君のような思いをしているお子さんがいるかもしれない。市長はSOSを大人が受けとめられなかった。子どもたちは受けとめられたけれどもという話をされたていたのですけれども、そういう思いを持たれている方がたくさんいらっしゃるかもしれない。そういうお子さんたちにこうしてほしいとか、こういう人に頼ってほしいとか、今の段階で再発防止策はもう少し先になりますから、おっしゃれるメッセージがあったらぜひおっしゃってください。

市長： これまでもこういったホットラインは今までも設けてはいますけれども、しかし、使った人もいないかもしれないけれども、少なくとも今回は使われていないということがあつたわけですか。ですから、仕組みをつくることというよりも、そういう状況にあるならば、まず大人に言ってくれと。とにかく伝えてくれということを申し上げ

たいです。必ずだれかがいるということを言いたい。

幹事社： 各社さん、よろしいですか。

司会： よろしいですか。それでは以上をもちまして市長会見を終了させていただきます。どうもありがとうございました。

市長： ありがとうございました。

(以上)

この記録は、重複した言葉づかい、明らかな言い直しや質問項目などを整理したうえで掲載しています。

(お問い合わせ) 川崎市役所総務局秘書部報道担当

電話番号：044(200)2355